



このコラムは、ORにかかわる概念、知識(手法、原理)、それらの図解、よい教材や問題、実学ORの実施経験、そこから得られた知恵やアドバイス、失敗談と教訓、新しい視点、視座、フレームワーク、未だ解けていない問題、面白い研究テーマなどを、“新鮮に”、しかも“コンパクトに”表現し、指示していただくものです。ユニークなアイデア、フレッシュな見方、発想、だれかと意見をたたかわせたい問題提起など、ふるってご投稿ください。(原稿は、刷り上がり、半ページから3ページに納まるようにお書きください。簡潔に! 加筆訂正をお願いする場合があります)

人間性の直視

菅野文友

一般に、生産方法が変わらなければ、製品の品質も変わらない。こういった事情は人間自体にとっても同様である。時の古今、洋の東西を通じて、人間そのものの本性は、文明開化の高速さに比較して、ちっとも開化していない。この辺のところをしっかりと直視してかかれないと、ORの多角的活用は到底おぼつかない。現実を冷静にみつけ、事実を語らせ、データで判断するのがORの基本であろう。しかし人間は、自分にとって都合の悪いことには眼をつむりたがるのである。諸事諸般、虚心坦懐な「温故知新」を旨とすべきである。

ORには、モデル化が大切である。そのモデルは、事実を現出する真実をしっかりと反映していなければならぬのは当然のことである。しかしそこに、人間の保有する本質的な弱さがひょっこりと顔を出す。つまり、自分の設定したモデルに合致しないデータには、いろいろと難辭をつけて外したが、**「へ理屈と膏薬は、どこにでもひつつく」と**いわれる。いわゆるOR屋には不必要に利口な人間が多く、しかもともすれば覆を喰いたがるから**「不都合」なデータを捨てる理由には事欠かない。**

「天網恢々、粗にして漏らさず」である。自己満足的論文作成を個人個人が営々として積み重ねていくうちに、ORセミナーの凋落、実世界から脱落、という現状出現が到来し、なかなか脱却できないことになる。もちろん、難解さをもって尊厳を誇り**「鬼面人を威す」**理論を展開し続けた所業も、それに一役買っていることも忘れてはならない。**「売家と唐様で書く三代目」**のとおり、崩れかけた屋台骨を立て直すのは容易なことではない。しかし、遅疑逡巡は不可である。未練を潔く断ちきらなければ、起死回生は望めない。

「建前より本音」である。本当に必要なことを実行する

ためには、目を開けて自分自身を見つめるという、幾許かの勇気が必要である。いろいろな意味でバラツキが少ないわれわれ日本民族の特色はチームワークにある。悪い面に目を向けると村社会になるが、善用すると**「三人寄れば文珠の知恵」**になる。その辺の呼吸つまりは適用領域をよく心得ることが真のOR的センスであろう。

そのための具体的な手段の1つが、先憂後楽、すなわち源流管理、あるいは段取り段階での万全な衆知結集、を基調とする日本のデザインレビューの活用である。そういったチームワークのできない陰気な徒輩は、人間の屑である。ツベルクリン反応と人柄は、陽性の方がいい。本来、人間は、気紛れであり、怠け者であり、不注意であり、根気が無く、単調さを嫌い、のろまでであり、論理的思考力が弱く、発作的に爆発して何をするかわからない、という存在であることを率直に認めよう。たとえば、いわゆる**「ヒューマンエラー」**は、人間であることの正当な証しであり、絶無を期待すべきものではない。いわば電気製品でのヒューズのようなものである。安全弁であり、検知器である。そういった人間性直視の融通無碍な思考こそが、活力ある実学的ORを促進するのである。ORを活かすも殺すも、それに関与する人**「財」**的人柄の空間的・時間的な結集の、繰り返しと持続によるスパイラルアップの有無である。高度情報社会による地球的狭隘化が文明の共有を促進している現在、各民族の固有の文化を、積極果敢に発揚しなければならない。活力ある実学ORのためにも、日本のデザインレビュー浸透の好機到来である。

参考資料

菅野・山田(編):「おはなしデザインレビュー」, 日本規格協会(1990)

かんの あやとも 東京理科大学